

小規模大学が地域で生きる アクティブ・ラーニング

報告者

小山 宏之（京都教育大学 教育学部 准教授）

炭谷 将史（聖泉大学 人間学部 准教授）

滋野 浩毅（京都文教大学 地域協働研究教育センター 専任研究員）

コーディネーター

古賀 松香（京都教育大学 教育学部 准教授）

参加人数

38名

学生が能動的に学修するアクティブ・ラーニングは、多くの大学で取り組まれるようになった。しかし、産学協働のプロジェクト型アクティブ・ラーニングは学生が当事者意識を持って主体的に課題に取り組むことが困難であったり、学内でのグループワークはコミュニケーション力不足によりうまく成立しなかったりと、効果的なアクティブ・ラーニングをすすめるためには乗り越えるべき課題も多い。本分科会では地域密着型の小規模大学の実践に焦点を当てる。小規模大学がその地域における存在価値を高めつつ、学生が具体的な地域の課題や人々と出会い向き合う中で学修の質を高めることを考えたい。3大学がそれぞれの特色を地域で活かすアクティブ・ラーニングの実践について報告する。報告を踏まえ、学生が当事者意識を持ち主体的にアクティブ・ラーニングをすすめる効果的・具体的方策について考えたい。その上で、学生が地域で学んだ学修の成果を捉え直し意味づけるための大学の役割について協議する。

〈第6分科会〉

小規模大学が地域で生きるアクティブ・ラーニング

1. 分科会のねらい

近年、アクティブ・ラーニングという教育方法が注目されるようになった。大学教育については平成24年の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』の中で、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と述べられ、受動的な講義受講からの脱却が大学教育のこれからの展開として期待されるようになった。具体的には、ディベートやグループ・ワークといった方法を講義内に取り入れるだけでなく、企業との商品開発や地域での問題解決など、学外との団体や共同体と共に活動しながら学修することが行われるようになってきた。しかし、そういった方法を取り入れれば学生が主体的・能動的に学ぶという単純なものではない。コミュニケーション力不足でグループ・ワークが成り立たない、問題解決をリーダーに任せて怠慢な態度に陥るといったことが散見されるのも事実である。

その点、小規模大学においては教員一人当たりの学生数が少ないことを活かし、アクティブ・ラーニングを効果的に行うことが可能なのではないか。また、小規模大学が地域社会においてその存在意義を発揮していく際に、アクティブ・ラーニングを絡めていくことで、地域にも学生にもプラスになるような学修活動が可能となるのではないか。そこで、本分科会では、小規模大学における地域密着型のアクティブ・ラーニングを取り上げ、以下のような課題について検討することとした。

- 現在注目されるアクティブ・ラーニングの実際的な課題とはどのようなものか
- 地域の人と出会うことで学生が主体的な学び手になるという自動的で単純な問題と捉えるのではなく、
 - ・主体的な学び手へ育てるための仕組みや具体

的方法とはどのようなものか

- ・主体的な学び手たちのコミュニティ・文化形成はどのように促進されるか
 - ・主体的な学び手であり続けるための支援とはどのようなものか について検討する
- 学生任せ・地域任せの活動ではなく、
- ・学生の学びを捉え直す
 - ・アクティブ・ラーニングの成果を大学はどう評価するのか
 - ・アクティブ・ラーニングの成果を大学はどう生かすのか について検討する

2. 報告の概要

午前の部では、コーディネーターによる分科会趣旨説明及び報告者紹介の後、報告者3名からの実践報告と学生1名からの事例紹介を行った。午前の報告および事例紹介についての質問を午前中の終了時に回収し、午後は質問への応答、参加者と報告者入り交じってのグループ・ディスカッションを行った。その後、グループでの討議内容を紹介していただき、コーディネーターが全体の議論をまとめ、15:30に分科会を終了した。

第1報告者の小山氏からは「京都教育大学地域スポーツクラブ（KYO2クラブ）の活動による学生の学び」と題して報告をいただいた。まず、京都教育大学と京都教育大学地域スポーツクラブという外部団体との協働的關係や活動概要を説明された後、KYO2クラブでの学生スタッフの活動内容や、KYO2クラブでの活動を含めたカリキュラ



ムで資格発行している京都教育大学独自の体育・スポーツ指導力育成プログラムについて紹介された。KYO2クラブの活動では、外部団体に学生スタッフを派遣するというかたちとなり、当該スポーツの部活動の学生が義務的にかかわるという主体性の低さや大学教員の関与の少なさ、団体指導者と大学教員の問題共有の少なさといった課題が挙げられた。一方の資格プログラムでは、大学教員の関与やフィードバックが学生に保障されることで学びが促進される側面や正課内の選択科目を選択することで学生が主体的に学ぶ側面があることがわかった。しかし、プログラムの認知度が大学内でも低いこと、就職への影響力が低いことが課題として挙げられた。また、アクティブ・ラーニングをどのように評価するかが各大学で課題とされているが、京都教育大学の教員・スポーツ指導者能力評価では、ティーチング・コーチングスキルとして、「インストラクション（教授）」「マネジメント（管理）」「インターアクション（相互作用）」「モニタリング（観察）」という4つの観点と下位項目によって評価を行っていることが紹介された。教員養成大学である京都教育大学では、KYO2クラブでのインターンシップを教員としての資質能力育成に今後ますます活用していけるように、以下のような展開の重要性が指摘された。学生と教員が学びを共有して次のステップへすすめていく学修の展開や、大学内での認知度を上げて大学全体としての協力体制の中で活動や学修サポートをすすめていく組織的展開が今後重要となるとされた。

この報告に関連して、京都教育大学学部生である加藤さんから、実体験に基づいて、学生の立場からの報告をいただいた。部活動の上意下達の中で主体的になれずにいる学生がいること等課題が述べられる一方で、活動の運営を任されていく中で学生が主体的になり教員としての資質向上につながるような内容を学んでいることが語られた。活動導入時点で教員としての資質能力を育成するという活動の意味づけがなされたり、目的が明確化されたりしていれば、学生の主体的取り組みや学修につながる可能性が示唆された。

第2報告者の炭谷氏からは、「地域社会と共に学び・育つアクティブ・ラーニング構築のプロセス」と題し、有志学生のボランティア活動→ゼミ活動→カリキュラム化という発展を遂げてきているアクティブ・ラーニングの展開プロセスが紹介された。周囲の教員が学生の様子から学生の学びを感じとっていったこと、そのことで活動の意義が認

められ、専攻の全学生がアクティブ・ラーニングプログラムに参加するよう必修化することになったことが報告された。しかし、必修化によって意欲のばらつきが生じ、相手のある活動での難しさへつながっている現状の課題も示された。小規模大学が自らの資源を活かす活動として地域でのスポーツクラブを立ち上げ、地域から声がかかるようになった成果と共に「手が欲しい」という声を大学としてどう受けとめるべきなのかという問題提起があり、アクティブ・ラーニングという学修内容を伴う活動を大学側が選ぶことや、地域の方とやりとりをして学生の学びにつながる内容に対する意識を地域にもってもらうことも必要であることがわかった。また、単純に地域に出て行ってアクションはしているが、アクティブに学ぶということまでいかず、アクション・ラーニングで終わってしまっていないかという問題も提起された。学生たちの学びが、「術（スキル）」→「論（仮説検証・指導論）」→「学」へとレベルアップしていくことが重要であると考えられるが、どのような方法でレベルアップを促進していくのが大学側の指導上の課題であるとされ、アクティブ・ラーニングなるためのファシリテーションが大学教員側に必要なのではないかということが指摘された。

第3報告者の滋野氏からは、「地域大学連携とアクティブ・ラーニング—京都文教大学における取組事例—」と題して報告がなされた。京都文教大学がもともとその地域に本拠を置く唯一の大学であるという強みを活かし、建学の理念「共生」の精神を具現化したプログラムを大学COC事業として展開している取組が紹介された。大学のアイデンティティ科目として全学生必修科目で1年次からアクティブ・ラーニングを実施していること、COC事業だからこそできる専門教員による全履修生へのフィードバックなど、全学必修科目の取組から、学生が主体的に申請して取り組む地域連携学生プロジェクトまで、幅広いアクティブ・ラーニングが実践されていることが報告された。また、地域インターンシップの取り組みでは、社会人基礎力の平均値が上昇しているという数値で明示できる成果も示された。大学の強みとしてはCOC事業採択前から地域連携の実績があったということ、小規模であることで市や区単位での関係作りがしやすいこと、地域連携推進事務部門のサポート力、専門部門があることで地域との窓口が明確で機能的となっていることが挙げられた一方で、全学的には地域指向が限定的になっていることや、手のかけすぎで本来のアクティブ・ラーニングのアド

リブの側面が活かしているかという課題、また地域指向を活かした教育評価や学内組織体制等は今後の課題であることが示された。

3. 質疑応答およびグループ・ディスカッションの概要と議論のまとめ

午前中の報告を受けて、参加者から以下のような質問が寄せられ、それぞれについて報告者からコメントいただいた。

【アクティブ・ラーニングを正課化する上での課題】

必修科目にした場合のグループ討論が苦手という学生への対応

正課の場合のAL活動の評価

地域の活動を教員自らの講義・演習での学修活動にどのように反映させていけるか

【出口問題】

アクティブ・ラーニングに熱心に取り組んだ学生の就職とのつながり

資格と出口をどうつなげるか

【小規模大学として】

地域連携セクションとは

学内での認知度をどうあげるか

他大学のアクティブ・ラーニングとの差別化

小規模大学ならではのメリット

【組織として】

活動の継続性の担保をどうするのか

質問に対する応答の中で、課題解決へ向かう具体的方策が示される等、議論が深まった。その上で、グループに分かれての討議を行った。コーディネーターから示した議論の焦点は以下の通りである。

【学生が地域で学んだ学修の成果を捉え直し意味づけるための大学の役割】

トピック①地域密着型だからこそ生じる学びとは？学修成果としてどのような変容が生じているのか？

トピック②正課内におさまらない個々の学修の成果を、どのように専門教育や体系的な知との関連の中で位置づけ、意味づけられるか？



トピック③大学が組織として地域指向・AL指向を効果的に推進していくために必要なこととは？

以上の3点のトピックに各自関心のあるところに分かれていただいたことで、活発なグループ・ディスカッションが行われ、以下のようなまとめを得た。

【小規模大学が地域で生きるアクティブ・ラーニングとなるために～今後の課題】

- ・必修化問題：必修化されると教員の関与が保障される一方で、学生の主体性が低下する。主体的な学びを促すような内容と仕組みが必要である。
- ・評価問題：目的・目標をどう設定するかを明確にする必要がある。指標をどのように設定するかが大きな課題であるが、数値化することで成果を実証することができるようにすることと同時に、評価の精緻化によりこぼれおちていく学生の学びを受けとめフィードバックしていくことも重要である。
- ・「術→論→学」問題：「スキルアップできてよかった」ではなく、大学として知の体系化にどう結びつけていくかということに取り組む必要がある。その際に専門教育の力を発揮することが重要だ。

以上のことから、地域と学生を結びつけていくアクティブ・ラーニングが、学ぶ充実感、学ぶ楽しさへとつながるように展開するための今後の方向性について、重要な示唆が得られたと考える。

コーディネーター：京都教育大学 古賀松香

京都教育大学地域スポーツクラブ (KYO2クラブ) の活動による学生の学び

京都教育大学 教育学部 准教授 小山 宏之

2016.3.6
第21回FDフォーラム
小規模大学が地域で生きる
アクティブ・ラーニング

京都教育大学地域スポーツクラブ (KYO2クラブ)の活動による学生の学び



京都教育大学
体育学科 准教授
小山宏之

Kyoto University of Education

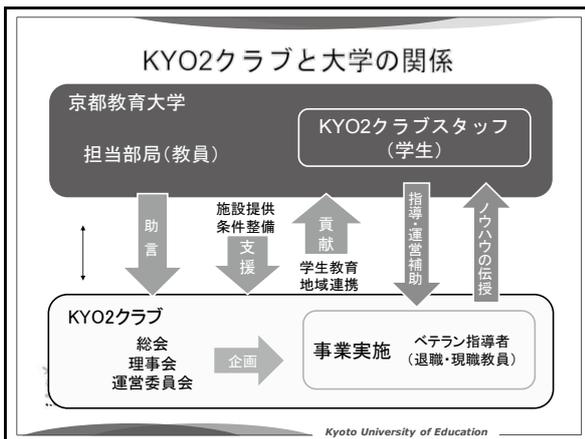
学生が学びを行うフィールドの紹介

~KYO2クラブ <http://www.kyo2sc.net/>~

- ・2008年4月から発足
- ・小学生スポーツ教室(陸上、バスケット、サッカー、体操)
- ・成人ランニング教室
- ・短期イベント(駅伝大会)
- ・会員数(平成27年度) 小学生:320人, 成人:80人
- ・学生スタッフ数(平成27年度) 113人



Kyoto University of Education



KYO2クラブに関わる学生の活動・プログラム

- ✓ KYO2クラブでの学生スタッフとしての活動
- ✓ 体育・スポーツ指導力育成プログラム



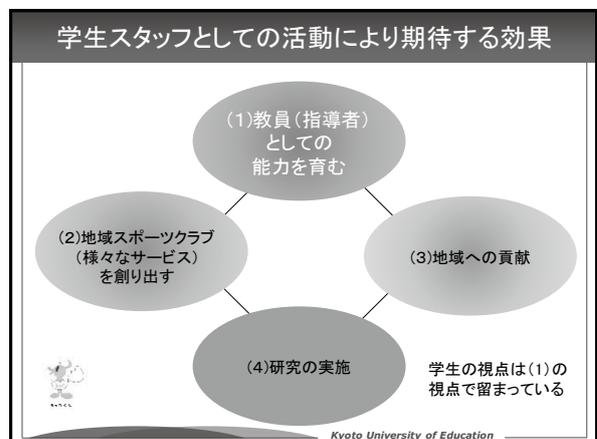
Kyoto University of Education

学生スタッフとしての活動の場

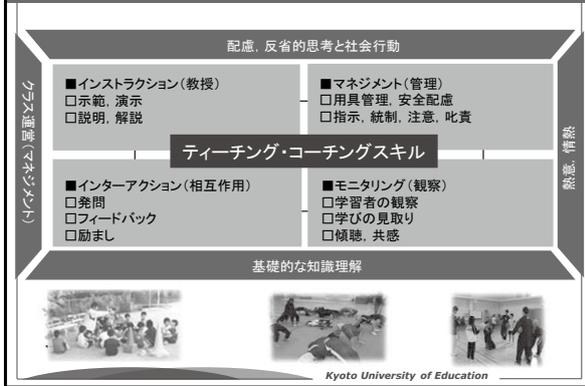
- 事務局
庶務・会計・広報・その他 週3回
- 陸上教室 年間18回
- バスケットボール教室 年間14回
- 体操教室 年間18回
- サッカー教室 年間21回
- ランニング教室 年間18回



Kyoto University of Education



教員・(スポーツ指導者)としての育むべき能力



KYO2クラブの教室における活動の特色

- ✓ 多様な子どもの集団(学年、地域、その他)
- ✓ 教室の目的は種目の競技力向上が主ではない
- ✓ 活動内容を学生主導で決定
- ✓ 全ての指導は学生主体
- ✓ 子ども・保護者とのコミュニケーションを教室外で実施

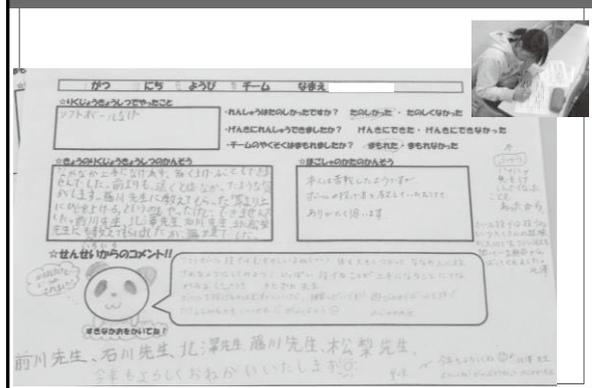


Kyoto University of Education

各教室における学生スタッフの活動の流れ



各教室の学生スタッフの活動例



各教室の学生スタッフの活動例

小学生理上競技教室 指導計画

日	時間	内容	担当
10/1	10:00-11:30	開校式、挨拶、自己紹介	学生スタッフ
10/2	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/3	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/4	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/5	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/6	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/7	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/8	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/9	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/10	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/11	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/12	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/13	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/14	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/15	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/16	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/17	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/18	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/19	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/20	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/21	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/22	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/23	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/24	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/25	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/26	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/27	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/28	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/29	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/30	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ
10/31	10:00-11:30	基本動作の学習	学生スタッフ

特徴:
各教室にスーパーバイザー(退職/現職が配置)
事前~教室~事後
の中でアドバイス

Kyoto University of Education

KYO2クラブ スポーツ教室を通じた活動での課題

学生側の課題

- 学生スタッフの意識の向上。
⇒ 各部活動での強制から始まる現状が強い。リーダーとそれ以外の学生の温度差
- 学生スタッフの継続性の確保
⇒ 1年での活動の終了、長く2年間で終わる学生が多い。
- 学生スタッフグループ(教室をまたいだ)の構築

運営・指導者側の課題

- 学生教育としての機能・目的の共有
⇒ 大学教員と教室指導者のミーティング不足
- 協力体制の構築(特に人材の確保)



体育・スポーツ指導力育成プログラム

KYO2クラブの学生スタッフ
 ...ほぼ100%が体育会所属学生
 (実施教室関連)

体育専攻外
 体育会所属学生外

KYO2クラブでの学び

体育・スポーツの指導力
 教員としての資質・能力

小学校においては、教員の高齢化も進む中で、ほとんどの教員が全教科を指導しており、教員が体育の授業に不安を抱えたり、専門性を重視した指導が十分に実施されていない状況もみられる。
 中央教育審議会(1. 学校と地域における子どものスポーツ観戦の充実)

東京都 小学校教諭採用予定者が子供と共に運動に親しむ取組
 小学校教員希望者150人へのアンケート...53%が体育指導に不安

Kyoto University of Education

大学を中心とした育成プログラムの構築

知識 ← 実践的指導力

育成プログラムの拠点
大学講義

所属専攻に応じた指定科目

京大教育大学
 地域スポーツクラブ
 (小学生スポーツ教室4教室)

スポーツクラブ指導入門(授業)
 インターンシップ I・II

講義 → **退職教員** → 事前・教室・事後指導 および評価

客員教授として招聘
 実践知・経験知の提供

プログラム修了者には大学認定の資格発行

Kyoto University of Education

育成プログラムにおける教員(指導者)能力の段階的養成

経験知 ティーチング・コーチングスキル

【指導力レベル】

基礎的知識 熱意・情熱

配慮、反省的思考 クラス運営
 社会的行動

インターンシップⅡ
 依頼を受け、一人の責任で指導ができる

インターンシップⅠ
 学校等の指導現場の指導下で、一人で指導ができる

スポーツクラブ指導入門
 学校等の指導現場の責任者の指導下で、指導補助ができる

Kyoto University of Education

育成プログラムにおける能力の評価観点

- ▶ **ティーチング・コーチングスキル**
 ・インストラクション、マネジメント、・モニタリング
- ▶ **基礎的な知識理解**
 ・運動種目(ルール、戦術)
 ・学習者特性(発育発達、心理的側面)
 ・メディカル(外傷障害、熱中症、応急処置、救命処置)
- ▶ **配慮、反省的思考と社会行動**
 ・アテンション(注意、対応)、・リフレクション(内省、振り返り)
 ・コミュニケーション(伝達、連絡)、・センス(マナー、エチケット、社会常識)
- ▶ **クラス運営(マネジメント)**
 ・指導計画作成(シーズン・月・週・日)
 ・事務処理(書類作成)・連絡、連携(指導者、保護者)
- ▶ **熱意、情熱**
 ・学ぶ姿勢(謙虚、真摯)、・指導者の構え(意欲、関心、態度)

Kyoto University of Education

評価の例(基礎的な知識理解について)

能力評価表

観点	項目	具体的内容	段階					判定	最終判定
			N	D	C	B	A		
基礎的な知識理解	運動種目 (ルール、技術、戦術)	A: よく達成できている(4点) ~D: 達成できていない(1点)	1						3.3
			2					○	
			3						
			4						
			5						
			6						
学習者特性 (発育発達、心理的側面)	指導者に求められる能力 5項目で総合判定		1						
			2				○	3	
			3						
			4						
			5						
			6						
メディカル (外傷障害、熱中症、応急処置、救命処置)			1						
			2				○	3	
			3						
			4						
			5						
			6						

スポーツクラブ指導入門/インターンシップ I・II

事前ミーティング
 Plan
 学生スタッフと一緒に参加

↓

教室の実施
 Do
 指導

↓

事後ミーティング
 Check
 教室の反省

客員教授とのミーティング指導

Kyoto University of Education

KYO2クラブ 小学生陸上教室について

京都教育大学 加藤瑞生

陸上競技部に所属
2年生、3年生(リーダー)として2年間活動

Kyoto University of Education

小学生陸上教室(小陸)の概要

- 年に18回の教室
- グループ編成
 - 1・2年生“きいろグループ”
 - 3・4年生“あか・あおグループ”
 - 5・6年生“みどりグループ”
- 登録児童数 153名
(実際に教室に来る人数は90～110人程度)
- スタッフ人数 30名(うち臨時スタッフ7名)

*スタッフはほぼ陸上部
*1回生が入学後に自動的にスタッフ登録

Kyoto University of Education

《共通目標》

- チームのルールやマナーが守れる
- 練習していく中で上達していく楽しさを知る。

《グループ目標》

- 1・2年生『体を動かすことの楽しさを知る』
- 3・4年生『グループ内で刺激し合いながら心身ともに成長する』
- 5・6年生『上達することの楽しさを知る』

Kyoto University of Education

平成27年度の活動

	きいろ	あか	あお	みどり
5月24日		顔合わせ&体ほぐし		
5月31日		体力測定		
6月14日	跳躍	短距離	投擲	短距離
6月21日		雨天(室内メニュー)		
7月19日		警報のため中止		
8月23日	短距離	跳躍	短距離	投擲
9月27日		防災訓練特別バージョン		
10月4日	投擲	短距離	跳躍	短距離

Kyoto University of Education

	きいろ	あか	あお	みどり
10月11日	短距離	投擲	短距離	跳躍
11月8日		雨天(室内メニュー)		
11月22日		体力測定		
11月29日	跳躍	短距離	投擲	短距離
12月13日	短距離	跳躍	短距離	投擲
12月20日	短距離	投擲	短距離	跳躍
1月10日	跳躍	短距離	投擲	短距離
1月31日	投擲	短距離	跳躍	短距離
2月7日		体力測定		
2月28日	短距離	投擲	短距離	跳躍

Kyoto University of Education

練習メニュー

- 短距離、跳躍、投擲をローテーションで行う。
- 約2時間の活動を4コマに区切り、内容を構成する。
- リーダーがメニューを考え、それを基にミーティングを行う。当日の動きの確認をする。

雨天時の対応

- 大学内の空き教室を使い練習をする。

Kyoto University of Education

例① 2014年5月25日 第1回 体ほぐしの練習計画 (きいろグループ)				
時間	メニュー内容	指導のポイント	使用器具	使用場所
1コマ	自己紹介 W-UP (手つなぎ鬼)	児童全員に自己紹介させる。2年生から。(大きい声で) 学校名、名前のみ。スタッフも自己紹介する。		フィールド PV側
2コマ	・体操 ・ドリル(各2本) ①大股歩行 ②スキップ(高く) ③スキップ(前へ早く) ④けつたたき ⑤もも上げ ⑥ダッシュ	基本的なドリル。毎回このドリルを取り入れていく。先生一人が一列担当し、指導。けつたたきやもも上げは速さを意識してしまう児童が多いのでスタッフが手で止めながら行う。	黄色ミニコーン4個	
3コマ	よーいドンの練習	次の教室が体力測定なので、よーいドンの練習をする。位置についての合図で同じ手と足が出ないように指導する。	黄色ミニコーン4個	
4コマ	リレー 3、4チームで競走。順番は子どもたちで決めさせる。		ミニコーン ハトン	

例② 2014年6月15日 第3回 短距離の練習計画 (きいろグループ)				
時間	メニュー内容	指導のポイント	使用器具	使用場所
1コマ	・Jog (いろいろな動きで) ・体操 ・色つき鬼	先生の言葉を集中して聞く。自分で周りをよく注意して見て、素早くコーンを見つけ行動する。		ホーム
2コマ	・ドリル (大股歩行、スキップ、サイドステップ、けつたたき、もも上げ、ダッシュ)	一つ一つの動きを丁寧に確認しながら、特にスキップを徹底的に!!	・カラーコーン(赤、黄、緑、青)各色4〜5つ ・大きめの黄色コーン	
3コマ	・100m計測	前回の体力測定でできなかった計測を行う	・コーン(SとG) ・ウォッチ2個	
4コマ	・ラダー(半分) (両足、ケンケン、右左右左、もも上げ) ・障害物リレー (サイドステップ10/20mラダー)	走りにつながるようにしっかりとももを上げるように。 体カテストの項目にもあるサイドステップ、直前にしたラダーの動きをおさらいしながらの障害物リレー	・コーン ・ラダー ・スティック	

例③ 2014年7月27日 第4回 投擲の練習計画 (きいろグループ)				
時間	メニュー内容	指導のポイント	使用器具	使用場所
1コマ	・Jog ・体操 ・ねことぬすみ	・Jogの時、スキップサイドステップを加えて様々な動きを取り入れる。	・コーン6つ	やりビット
2コマ	・ドリル (大股歩行、スキップ、サイドステップ、けつたたき、もも上げ、ダッシュ)	・スタッフ一人で一列指導する。	・コーン4つ	
3コマ	・投げの指導 ↓ ・紙飛行機投げ	・ボールの持ち方、腰の向き、足の向き、左手の使い方etc ・2人組で向かい合って紙飛行機を投げる。紙飛行機は2人で1つ。	・紙飛行機	
4コマ	・飛行機投げレース(個人戦) ・今日の振り返り	・一人ひとつ紙飛行機をもち、投げて飛んだところまで取りに行き、そこからまた投げる。	・紙飛行機	

例④ 2014年12月14日 第12回 跳躍の練習計画 (きいろグループ)				
時間	メニュー内容	指導のポイント	使用器具	使用場所
1コマ	・JOG、体操 ・30秒間跳び ・個人種目に挑戦!	・同じ回数くらいの子供でチームをつくり、4チームに分ける。	短縄 記録シート 鉛筆	
2コマ	・ドリル (馬跳び、大股歩行、もも上げ、スキップ、レッグカール、サイドステップ、クロスステップ、ダッシュ)	・ドリルに新しい練習を増やしてみる。 ・馬跳びは最初少し練習をさせて、怪我のないよう注意する	コーン	
3コマ	① 走り幅跳び (両足着地の練習 ・片足踏み練習) ② 立ち幅跳び ・ボールタッチ	① 跳び箱を使用し、両足で同時に着地できるように指導したあと、ケンステップを使用し短い助走から片足で踏み切る。 ② ジャンプの方向を意識	跳び箱 ケンステップ	LJビット HJビット
4コマ	・走り幅跳び計測 ・ドリル (リフティング、ホッピング)	3コマ目の練習を思い出しながらコツを伝えながら計測、記録する。 計測していない子どもたちにはドリルをしてもらう。	メジャー スコップ どんぼ ラインカー 記録用紙	

学生スタッフ:リーダー(2年目以降の学生)

＜教室前＞

- メニューを考える
- 事前の打ち合わせでメニュー、当日の動きの確認をする

＜教室当日＞

- 当日の練習で子どもたちを引き連れる

学生スタッフ (1年目の学生)

- サポート役としてリーダーが考えたメニューが円滑に進むように動く
ex.コーンやマーカなどの準備
子どもに混ざって練習に参加
- 活動の輪に馴染めない子どものサポート
- 児童に混ざって一緒に身体を動かす

 Kyoto University of Education

リーダーを経験して

- 練習内容の説明の仕方(立ち位置、話し方)
- 児童が飽きないための時間の使い方の工夫
- 練習中の声掛けの仕方・タイミング

➡ 教育実習でも役に立つ
指導のポイントが身につく

➡ 実際の教育に役立つ指導法を
身に付けることができる

 Kyoto University of Education

学生スタッフ同士の関係

- 相談、意見交換することの大切さ
- 上回生から下回生への引き継ぎ
- 打ち合わせでメニューの確認と当日の動きの確認
- 教室が後半になるとリーダー以外のスタッフもメニューを考える。
- コメントカードの内容を共通認識
(保護者の方・子どものコメント)



Kyoto University of Education

小陸で学んだこと

- グループ運営
 - ・グループ内のルール作り
 - ・子どもの成長を感じられる
- メニュー内容の工夫
 - ・子どもの人数や能力
 - ・気候を考慮したメニュー内容
- 人間関係
 - ・スタッフ同士でのコミュニケーション
 - ・保護者の方との意思疎通



Kyoto University of Education

小陸での困ったこと

- 人間関係
 - ・児童とスタッフとの距離感(関係性)
 - ・保護者の方とのやり取り、保護者の方の思い
- 物的環境
 - ・用具不足
- 活動環境
 - ・季節、天候
 - ・グラウンドの環境



Kyoto University of Education

学生スタッフにとっての小陸

- 学級経営(グループ運営)を学ぶことができる
- 継続して子どもたちと関わる機会
- 対応力が身につく
- 学生同士でのやり取りの重要性
- 回を重ねるごとに円滑に進められるように



Kyoto University of Education

地域社会とともに学び・育つアクティブ・ラーニング構築のプロセス

聖泉大学 人間学部 准教授 炭谷 将史



地域社会とともに学び・育つアクティブ・ラーニング構築のプロセス

聖泉大学人間学部 炭谷将史

(第6分科会 小規模大学が地域で生きるアクティブ・ラーニング)

+ 0. はじめに

- 聖泉大学に「アクティブラーニング」(以下、ALと略す)の専門家はいない。必要な活動をしていたら、いまの状態にたどり着いた。
- 学生たちの「学び」という点では、まだまだ検討できていない部分が多い。
 - 専門教育におけるALの役割
 - ALの意義を学生たちに「見える化」する方法
- ご参加の先生方からのご助言に学びながら、さらに充実した学びを構築したいと考えている。

+ 1. 大学の特徴

- 聖泉大学は滋賀県彦根市(稲枝地区)の最南端に位置し、看護学部と人間学部の2学部2学科を有する小規模大学である。
- 人間学部は臨床発達心理専攻、キャリア創造専攻、健康運動心理専攻の3つの専攻を有する
- 学生総数は両学部合わせて600名弱である。
- 本報告で扱うALプログラムは、人間学部健康運動心理専攻の活動である。

+ 2. 活動の特徴

- 健康運動心理専攻では、以下の7つのALプログラムを用意し、履修登録の際に活動の概要を説明し、ゼミでの専門の学びの一環として各人1つは選択するように指導している。
- 介護予防活動
- スポーツ指導活動(ホッケー教室、サッカー教室(女子))
- 野外教育活動
- スポーツマネジメント活動(イベント企画・運営)
- 子供運動遊び活動(小学生、幼稚園)
- * サッカー教室と子供運動遊び活動は後述の社団法人の事業(有料)

各種活動の様子



図1 子供運動遊び活動での夏の遠足(養老天命反転地(岐阜県))

各種活動の様子



図2 介護予防教室でストレッチングをリードする学生

+ サッカークラブ活動の様子



図1. メンタルトレーニングの一環としてレポートを作成する中学生

+ 子供運動遊び活動の様子



図2 秋の運動会シーズンに向けて専門家を招いてのかけっこ教室

+ 3. カリキュラムにおける位置づけ

- 平成21年度から、有志の学生によるボランティア活動として行われていた。
 - スポーツ系の強化指定クラブ設立とリンク
- 平成27年度より、専攻に所属する学生はゼミ活動の一環として7つの中から1つの活動を選び、活動を行っている。
- 平成28年度入学生からは、「プロジェクト演習」として、ようやくカリキュラムに組み込むことができた。

+ 4. ALプログラム構築のプロセス

1. きっかけ
 - 総合型地域スポーツクラブの育成
 - 「地域に開かれた大学」を目指し、大学資源を広く地域社会に生かすための窓口として聖泉スポーツクラブを平成20年4月に創設。
 - サッカークラブ、野球クラブ、太極拳クラブ、子供の運動遊び活動等、複数の活動が生まれた。
 - 特に、平成24年頃までにサッカークラブが100名を超える会員を集めるようになった。

+ 4. ALプログラム構築のプロセス

2. (一部の) 学生からの参加希望

- 平成21年4月から、炭谷ゼミ（運動部所属）の学生の学びの一環として導入
 - 強化指定クラブ選手の学び
- 友達同士で誘い合ったり、自分もやってみたいと考える学生が5名参加
 - 具体的な問題（子供が話を聞いてくれない等）が眼前に迫ってくると学びが起動する

+ 4. ALプログラム構築のプロセス

3. 地域ニーズの高まり

- 小学生対象の運動遊び活動にとどまらず、学生たちからの要望等によって、幼稚園での運動遊び活動、高齢者の介護予防等、ALを展開できる場が拡大
 - 地域からのニーズは多く、お断りするケースも少なくなかった（地域において学生はとても大切な人的資源）
 - 単なる「手」だけで終わらないように、ALとして成立させる必要がある（地域に対しても明確に要求を出す）

+ 4. ALプログラム構築のプロセス

4. 他の専攻への波及効果

- 他の専攻の教員もALの重要性に気づく（平成25年頃）
 - 複数の先生方が学生の成長を実感
- カリキュラム編成の際に、ALを単位化して全学生が参加すべきという議論が盛んになった
 - 他の専攻の先生が自らのゼミ生とともに不登校児童のためのフリースペースを開設
 - 健康運動心理専攻では全学生がALプログラムに参加

+ 5. ALプログラム構築の課題

1. 学校法人との丁寧な調整が必要

- 活動が充実するほどに、学校法人側や大学本部側に活動の意義をご理解いただくことが重要。
- また、会計や名称使用などに関して、丁寧な説明をする必要がある。
- 最終的には総合型地域スポーツクラブとしての活動は解散。平成26年5月に法人化（社団法人）し、サッカークラブ、子供の運動遊び活動、女子サッカー教室など、いくつかの活動だけを継続させ、事業化している。

+ 5. ALプログラム構築の課題

2. 学生たちの参加意欲

- 必修化することで、いろいろな個性を持った学生が参加することになる
 - ボランティアの時は自主勉強会などを開いていたが、現在は当時とは異なる課題を直面せざるを得ない

+ 5. ALプログラム構築の課題

3. 学びの質の担保

- 専門的能力の高まり
 - 卒業研究の題材
 - 研究法・文献講読等専門の学び
- 汎用的能力の高まり
 - 引き出しが増える
 - 子供や高齢者と人間関係を通わせることは、実はそれほど簡単ではない。

+ さいごに

- 本日は、数多い分科会の中から本分科会にお越し頂き、有難うございます。
- アドバイス・ご感想などをお寄せいただけたら幸いです。

sumiya-m@seisen.ac.jp

地域大学連携とアクティブ・ラーニング

京都文教大学における取組事例

京都文教大学 地域協働研究教育センター 専任研究員 滋野 浩毅

1. 報告の目的

地域唯一、かつ小規模大学である京都文教大学において取り組んでいる、大学が立地する地域と連携した教育、とりわけアクティブ・ラーニングを事例に、その意義と現時点での成果と課題について、報告者らによる実践をもとに考えることを目的とする。

2. 京都文教大学について

(1) 京都文教大学の概要

- ・ 1996年に4年制大学設置（人間学部文化人類学科・臨床心理学科）。
- ・ 現在2学部3学科（総合社会学部総合社会学科（学科内に5コースあり）、臨床心理学部臨床心理学科、同教育福祉心理学科）
- ・ 学生数 1810人（総合社会学科 899人、臨床心理学科 675人、教育福祉心理学科 236人）
- ・ 京都文教大学の教員数 82人（総合社会学科 36人、臨床心理学科 22人、教育福祉心理学科 24人）、一人あたり学生数 22.8人、職員数 71人、同 26.4人）。

※学生数は2016年2月1日現在、それ以外は2015年5月1日現在。

(2) 京都文教大学における地域連携の経緯

- ・ 文化人類学科（当時）では、2003年度から教員による共同研究プロジェクト「（人と人を結ぶ）地域まるごとミュージアム構築のための研究」を開始。臨床心理学科（当時）では、1997年度より不登校児童生徒の家庭訪問活動や乳幼児を抱えた専業主婦の家庭を訪問しメンタルサポートを実施した。また、現代社会学科（当時）では、2005年度から地元、宇治市を中心に地域住民や地元スーパーとともに地域の活性化に取り組むことを目的とした産学民連携プロジェクトに参加。
- ・ 平成19年度「特色GP」に採択される。「現場主義教育充実のための教育実践～地域と結ぶフィールドワーク教育～」(～平成21年度)
- ・ 平成20年度「教育GP」に採択される。「モノ・ひと・地域を活かす大学ミュージアム」を活用した「文化コーディネーター」養成プログラム。(～平成22年度)
- ・ 文部科学省平成24年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に連携校として採択。(～平成28年度)
- ・ 文部科学省平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」(代表校：龍谷大学、京都産業大学)に連携校として採択。(～平成28年度)
- ・ 平成26年度「地（知）の拠点整備事業」(大学COC事業)に府内私立大学で唯一採択。(～平成30年度)

(3) 京都文教大学における地域連携を推進する体制

- ・ 2006年度、フィールドリサーチオフィス（FRO）を設置。
- ・ 2014年度、地域協働研究教育センターを設置。

3. 大学 COC 事業による地域と連携したアクティブ・ラーニング

(1) 京都文教大学の COC 事業

「京都府南部地域ともいき（共生）キャンパスで育てる地域人材」

大学の立地する京都府宇治市、京都市伏見区と連携し、地域全体で学生、教職員、地域住民が共に学び合い、分かち合い、互いに尊重し生かし合う「ともいき（共生）キャンパス」を創造すること目標としている。また、「ともいきキャンパス」の中で、地域で学び、地域に貢献できる人材の育成を目指す。

(2) 主な取組

- ・ 地域志向研究・地域との共同研究（研究）
- ・ 地域志向教育を軸とした教育カリキュラムと KBU 学士力（教育）→（3）にて詳述。
- ・ 地域連携学生プロジェクト（課外活動）
- ・ ともいきプラットフォーム機能（社会貢献）

(3) カリキュラム

1 回生：「ともいき力」の基礎を養成

- ・ 全学必修の「地域入門」を 2015 年度より新設し、1 回生後期から、まずは地域、社会のイメージを具体化と、地域と関わる意義そのものや地域について考えることの重要性を理解する。
- ・ 「地域入門」は大教室における講義形式の授業だが、複数の教員、地域連携担当セッションの事務職員、上回生の授業補助者（SA＝スチューデント・アシスタント）によるチームティーチングと、行政職員や地域で働く卒業生等によるゲスト講師、授業時間内のワークが特色。

2 回生：「ともいき力」の基礎的な実践を体験

- ・ 「プロジェクト科目」、「地域ボランティア演習」、「地域インターンシップ」などの「現場実践教育科目」で実践を体験する。

3・4 回生：「ともいき力」の実践・応用

- ・ 低回生時からの地域志向教育を専門教育に有機的に接続。
- ・ 京都府南部地域の行政や企業、各種団体等と連携しながら、より地域志向の教育活動が可能となるよう地域実践の場を確保。
- ・ 地域と共に学生の更なる「主体的な学び」の促進と、「ともいき社会を実現できる力」を育成。→「ともいき力」＝KBU 学士力

(4) 報告者の実践取組から

①1 回生以上配当の全学修科目「地域入門」

授業内でグループワーク等を取り入れているが、それが苦手な学生も少なからず存在する。そういった学生に対しては、授業中は SA 中心に学生たちに対して働きかけを行ったり、授業全体として教職員がケアを行うなど、手厚いフォローを行っている。

評価については、毎回ワークシートの提出を課し、教員が添削をし、コメントを必ず残し返却しているが、膨大な作業量である。

全学部必修科目ゆえに、内容に興味関心を持ってない学生もいるが、学科、コースにおける地域との関係について他の教員が話したり、ゲストスピーカーとして招いた卒業生のお話を聞き、地域と自分との関係、地域における学びの意味、意義に気づいた学生も現れた。

②2 回生以上配当の現場実践科目「プロジェクト科目」

地域や組織等、多様な「現場」における実践を通じて、ジェネリックスキルを身につけ、3回生からのゼミや卒業論文、就職活動、また正課外の活動につなげることを目的とする「現場実践科目」の一つである。現場での学びを通じて、社会人基礎力に関する項目で学期初と学期末を比較し、大きな伸びを見せる学生もいるが、現場での学びには、想定外の出来事や困難を乗り越えて得ることのできる、生き活きとした学びがある。それをどのように評価するかを考えていかなければならない。

③同「地域インターンシップ」

②と同様、現場実践科目の一つである。年度初めのエントリー、学生の希望ならびに適性と合致した実習先を担当教職員でマッチングさせ、マナー研修や業界・企業等の研究、履歴書作成といった事前学習と、実習前の学生の事前訪問を経て、夏季休暇中に10日～2週間程度の実習を行う。研修後は、実習の振り返りを行う事後学習として、実習生と教職員でおこなう実習報告会、実習先等へも公開する実習生発表会を経て、最後に成果報告書を作成し、実習先等へも報告を行う。

実習の前後で社会人基礎力の平均値が上昇した他、多くの学生が行動に責任感が伴うようになった、社会との関わりに積極的になったと複数の教職員が評価した。

④課外活動としての「地域連携学生プロジェクト」

地域の課題解決を目指す学生たちの自主的な取り組みを募集し、支援する制度で、申請書とプレゼンテーションを地域連携担当教員と外部審査員で評価し、採択する。2015年度は継続プロジェクト2件、新規プロジェクト2件を採択が採択されている。

プロジェクトの前身はゼミ活動というものもあるが、プロジェクトになることによって、ゼミ、学部を超えた活動になるとともに、地域との関係に持続性が担保されることにも寄与している。

4. 考察—フロアからの質問ならびにディスカッションより

(1) 授業運営の問題

地域連携担当の事務セクションであるフィールドリサーチオフィスの存在が大きく、地域連携に係る「教職連携」が取れている。ただ現在は、COC事業の補助期間中ということもあり、担当教職員の「がんばり」に支えられていることが大きい。COC終了後、全学的な仕組みにしていくことが今後の課題である。

(2) 評価の問題

地域での学びに係る評価方法（ルーブリック等）を開発中である。一方で、地域等現場での学びには、想定外の出来事や困難を乗り越えて得ることのできる、生き活きとした学びがある。定型化された指標による評価とともに、現場ならではの学びに関する評価方法を考えていかなければならない。

(3) 小規模大学としての“強み”は何か

小規模大学ゆえ学生数も教職員数も少なく、地域連携も大学の立地する地域（京都府宇治市ならびに京都市伏見区とその周辺）に集中せざるを得ないため、顔の見える関係になりやすい。このように、大学の持てる資源が限られていることが逆に地域との関係性を深めることにつながっている。

地域大学連携とアクティブ・ラーニング -京都文教大学における取組事例-

滋野浩毅
(京都文教大学 地域協働研究教育センター)
2016年3月6日

京都文教大学の概要

- 1996年に4年制大学設置(人間学部文化人類学科・臨床心理学科)。
- 現在2学部3学科(総合社会学部総合社会学科(学科内に5コースあり)、臨床心理学部臨床心理学科、同教育福祉心理学科)
- 学生数 1872人(総合社会学科937人、臨床心理学科696人、教育福祉心理学科239人)

京都文教大学の取組概要

- 平成26年度文部科学省大学COC事業採択(H26~30年度)。
- 事業名は「京都府南部地域ともいき(共生)キャンパスで育てる地域人材」
- 京都府南部地域に本拠を置く唯一の大学であるという強みを活かし、京都府宇治市、京都市伏見区と連携し、地域全体で学生、教職員、地域住民が共に学び合い、分かち合い、互いに尊重し生かし合う「ともいき(共生)キャンパス」を創造することが目標。
- 「ともいき(共生)キャンパス」の中で、地域で学び、地域に貢献できる人材育成をミッションとしている。
- そのために研究・教育・社会貢献各方面で「地域志向」を推進中。
- 地域における拠点としての大学という考えに基づき、地域のプラットフォーム、シンクタンクとしての機能整備と人材育成。
- 採択を契機に、これまでの地域連携をベースに「地域志向教育」のカリキュラムと評価の開発に向けて取り組んでいる。

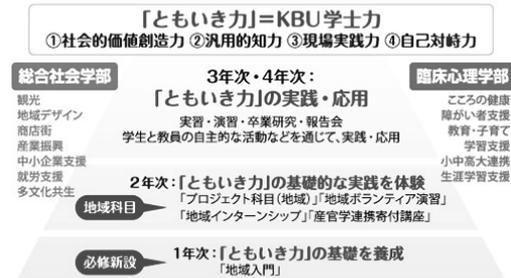
「ともいき(共生)キャンパス」の創造

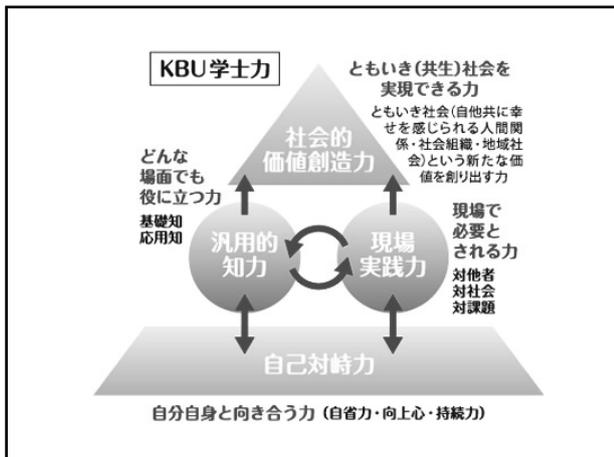
- 建学の理念「共生」の精神の具現化
- 大学のリソースを地域発展に
- 地域のパワーを大学教育に
- 大学と地域がともに生かし合い、共に生き生きする

京都文教大学のCOC事業概要図



ともいき人材の育成





1年次「ともいき力」の基礎を育成 「地域入門」

- 2015年度より開講された1年次全学必修の科目
- KBUアイデンティティ科目の「京都文教入門」を「大学入門」と「地域入門」に分割(それぞれ8回授業)
- 「KBU学士力」の基礎を要請する科目の一つとしての位置付け

1年次「ともいき力」の基礎を育成 「地域入門」

- 大講義でなぜALの要素を取り入れることができたのか?
- 上回生授業補助者(SA=スチューデントアシスタント)6人が参加
- 地域連携担当職員が教員、SAをサポート
- 3名の教員が担当

「教職学」のチームティーチング

1年次「ともいき力」の基礎を育成 「地域入門」

- 2学部400人を超える学生が受講する授業でありながら、個人ワーク、ペアワーク、グループワークを授業時間内の随所に導入
- 連携する地域の自治体職員や地域で働く卒業生をゲストで招く
- 毎回授業終了後にワークシートと提出させ、後日返却
- 学期末レポートも次年度初めに返却予定

1年次「ともいき力」の基礎を育成 「地域入門」

- 期末レポートで問うたこと

- ①これまでの授業によって「地域」についてどのような考えを持つようになったか
- ②今後の大学生活における「学び」の中でどのように「地域」と関わるか
- ③大学を出た後に社会人としてどのように「地域」と関わるか

2年次「ともいき力」の基礎的な実践を体験

- 「現場実践科目」(履修年次2年次からの登録必修)
- 地域ボランティア演習
- プロジェクト科目(地域)
- プロジェクト科目(テーマ)
- インターンシップ(大学コンソーシアム京都)
- 地域インターンシップ
- 海外インターンシップ
- ボランティア論

プロジェクト科目(地域)

- 「地域で学び、地域に学ぶ、そして地域に活かす」をコンセプトに、京都府南部地域をフィールドとして「現場実践力」を育成する授業
- 2015年度は前期3クラス、後期6クラス開講
- 受講者数は前期40名、後期59名
- 学期末に「合同成果発表会」を開催し、優秀発表クラスを表彰

プロジェクト科目(地域)

前期開講クラス

- 「地域探検・発見」
- 「地域企業に学ぶ社会的ニーズ」
- 「地域企業と考える健康食品市場」

プロジェクト科目(地域)

後期開講クラス

- 宇治・伏見 防災プログラム
- 巨椋野菜でカフェ・ランチ！
- 地域企業に学ぶ社会的ニーズ
- ニュータウンのまちづくり
- 地域のグローバル企業に学ぶ
- 協働のまちづくり

プロジェクト科目(地域)

- 「合同成果発表会」では授業協力者や連携先の関係者も招待
- 上記外部の授業関係者や受講学生も評価に加わる
- 学期初と学期末に社会人基礎力に係るアンケートを実施
- アンケートでは「働きかけ力」「実行力」「計画力」「創造力」「状況把握力」に伸びが見られた

地域インターンシップ

- 2014年度から試行的導入(単位認定なし)
- 2015年度カリキュラムより正課化(=2016年度新2回生から単位認定)
- 2014年度:総合社会学部観光・地域デザインコース所属学生11名が9つの研修先で実習
- 2015年度:総合社会学部全コース17名が15の研修先で実習
- 2015年度は2回生も4人が参加

地域インターンシップ

- 2015年度の実施スケジュール
- 4月:説明会
- 5月:事前面談にて希望実習先とのマッチング
- 5~7月:事前研修
- 7月:実習先との事前面談
- 8~9月:実習(10日~2週間程度)
- 9月:事後報告会(参加者、教職員)
- 11月:成果発表会(一般公開)
- 12月:成果報告書作成

地域インターンシップ

- プログラム開始時と終了時に実施したアンケートでは社会人基礎力の平均値が上昇
- 研修後、多くの学生が行動に責任感が伴うようになった、社会との関わりに積極的になったと複数の教職員が評価
- 2016年度からは対象を臨床心理学部学生にも拡充し、正課化
- 臨床心理学部学生の学問特性に応じた研修先を開拓中

3年次・4年次 「ともいき力」の実践・応用

- 実習・演習・卒業研究・報告会等において、学生と教員の自主的な活動を通じて、実践、応用する
- 教員の地域志向研究や課外活動等への参加
- 「ともいき人材」となって社会へ

ともいき力=KBU学士力

地域連携学生プロジェクト

- 地域に根ざし、地域に学び、地域の課題解決を目指す学生たちの自主的な取り組みを募集し、支援する制度
- 申請書とプレゼンテーションを地域連携担当教員と外部審査員で評価し、採択
- 2015年度は継続プロジェクト2件、新規プロジェクト2件を採択

地域連携学生プロジェクト

- 2015年度採択団体
- ①京都文教大学バスツアーズ(新規)
- ②響け！元気に応援プロジェクト(新規)
- ③宇治☆茶レンジャー(継続)
- ④商店街活性化隊 しあわせ工房CanVas(継続)

地域連携学生プロジェクト

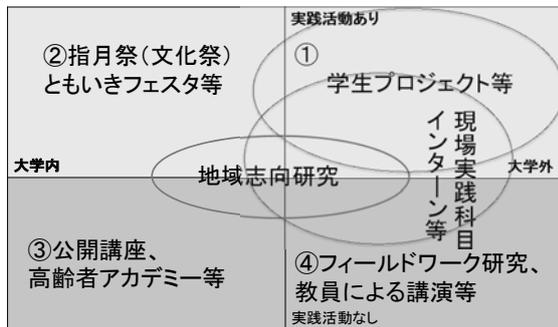
- 成果
- 京都文教大学バスツアーズ: 向島団地居住の高齢者との交流促進
- 響け！元気に応援プロジェクト: 地域から発信し、地域を越えたファンとの交流
- 宇治☆茶レンジャー: 複数のイベント参加、メディアへの露出、2014年度「京の公共人材大賞」奨励賞受賞
- 商店街活性化隊 しあわせ工房CanVas: 宇治橋通り商店街「公認」団体に、関西観光教育コンソーシアム学生生活動成果発表会最優秀賞受賞

大学から見た地域・大学連携

	実践活動あり
②大学祭・イベントなど	①スタディツアー、域学連携など
大学内	大学外
③地域の人々による講演、公開講座、共同研究など	④フィールドワーク研究、教員による講演など
	実践活動なし

出所: 飯盛義徳『地域づくりのプラットフォーム』2015。95ページ

京都文教大学に当てはめると...



出所: 飯盛義徳『地域づくりのプラットフォーム』2015。95ページをもとに作成

大学の強み

- 大学の立地する宇治市との、COC採択前から続く地域連携の実績とノウハウの蓄積。
- 大学が小規模で、地域密着ゆえの関係性の作りやすさ(地域の各連携主体に教職員、学生の顔と名前を覚えてもらいやすい)。
- 宇治、伏見にサテライトキャンパスを設置。地域に開放したり、地域での授業や活動のベースとして機能。
- 地域連携を推進する事務部門である「フィールドリサーチオフィス」の存在。地域志向の研究・教育・社会貢献各事業を教職連携で推進。また、行政や地元企業等との連携窓口として機能。

取組の課題

- 未だ学生も教職員も「地域志向」は限定的。
- 学生教育に手をかけられ、「地元志向(「地域志向」とは必ずしも一致しない)」の学生ニーズとは合致しているせいか、地域への理解、地域で活動する学生は育ってきている一方、「手のかけすぎ」で、本来ALが持つ現場における予想外、アドリブの妙味が出せるか。また現場で起こる困難を乗り越える力が身につくか。
- 教職学(教員・職員・学生)の協働、そして地域に「出口」があるのが「あるべき姿」。
- 「地域志向」を推進し、根付かせるための教育評価や学内組織体制、事務手続きは未整備(教育評価については、COC専任研究員を設置し、整備中)。

今後の展望

大学・学生

- 人との交流や現場での経験や学びによる成長→現場の教育力
- 学生が地域の広報媒体に
- 地域との交流や経験による愛着→卒業後訪れてくれる、仕事として、あるいは居住先としての選択肢にも?

今後の展望

地域

- 異なる視点や価値観との交流による地域変革
- 大学・学生との継続的な交流によって、その背後にあるネットワークの活用
- 受け入れ体制の整備→卒業後訪れてくれる、職場として、あるいは居住先としての選択肢にも?
- 信頼関係の構築